ソードアートオンライン オルタナティブ　イモータルブラッド

さくやそん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２０２２年１１月４日、デスゲームソードアートオンラインは始まった。多くの犠牲を出しつつも７５層にてクリアされたこの物語には、実は裏の尽力者がいた。紫の暴風。人々がそう呼ぶ彼は、黒の剣士の影に隠れたもう一人の英雄。ＳＡＯ事件のもう一人の解決者が作る、希望のストーリー。彼はこのアインクラッドにて何を得たのか。ＳＡＯの真実が今明かされる。

目次

序章　原点への帰還 ―― 1
第壱話　イザヨイの軌跡 ―― 6
第弐話　四十八層ボス戦 ―― 10
第参話　４８層ボス戦（終） ―― 14
第四話　陰謀（序） ―― 19
第五話　不死鳥の転臨 ―― 24
第六話　迫る悪意 ―― 29
第七話　鳳凰の翼 ―― 33
第八話　不死鳥の半身 ―― 37
第九話　冥界の女帝 ―― 40
第十話　新たなるヒロイン ―― 43
第十二話　新たな力 ―― 47

序章　原点への帰還

俺は薄暗い通路で敵と剣を打ち合っていた。
敵は人に良く似た姿のニンジャ型モンスター、▪シャドウエッジ▪。
刀に近い形状の片手剣を使う。
対して俺は、刀身がおよそ２０センチ程の小さな短剣を使っている。
当然ながらリーチという点では負けるであろう。
だが、何も遠くから剣を当てられるなど、小さなアドバンテージに過ぎない。
短剣には他のどの武器にも無い圧倒的なアドバンテージがある。
それは連撃数だ。
小回りがきくために、剣を振り、手元に戻す動作がとても速い。
そして、この世界では連撃数はとても大切になってくる。
手元の赤い炎を模した短剣が青く輝く。
直後、１２発もの攻撃がパーティクルを散らしつつシャドウエッジを襲った。
短剣用ソードスキル▪アクセルレイド▪
ソードスキル、それはこの世界のシステムアシストにより、攻撃に一際強い威力をも

たらす技である。
再び手元の剣が、今度は赤に光り、重い一撃がシャドウエッジのＨＰを０にした。
そして、シャドウエッジはポリゴン片となり爆散した。
一発一発の威力が低い短剣にしては珍しい、超火力単発技・アーマーピアース・
それがこの世界に存在する命の一つを絶った。
目的を果たしたこともあり、俺は主街区へ戻ることにした。
帰途、ふと俺は、全てが始まったあの日のことを思い出していた。
２０２２年、人類はついに完全なる仮想空間を手に入れた。
そして、その世界に初めてのＶＲＭＭＯＲＰＧが発表された。
・ソードアートオンライン・
初のＶＲＭＭＯＲＰＧだったこともあり、βテストは凄まじい倍率を記録し、人々の間に瞬く間に広まった。
発売日には老若男女問わず、長い行列を作ったという。
ソードアートオンラインは初回の１万本がすぐになくなった。
制作者は茅場　晶彦。
仮想空間を実現したヘッドギア型の機械・ナーブギア・の制作も行ったことから、彼はまさにＶＲの一時代を築いた。

ソードアートオンラインは何の問題もなく、無事にサービスが開始された。
そして今、サービス開始に十秒と遅れずログインした俺、・イザヨイ・は必要なものを買い集めると、すぐにフィールドへ出た。
辺りは草原で、イノシシ型モンスターが多くＰＯＰしている。
その内の一匹へ攻撃を仕掛ける。
どんどんと攻撃していき、ついにイノシシのＨＰが3割を切ったとき、俺の手が動き、ソードスキルのモーションに構える。
すると、短剣はオレンジに輝き、単発技・サイドバイト・がヒットする。
そして、イノシシのＨＰは０になり、爆散した。
俺だって元βテスターだ。
勘を取り戻しつつ、イノシシを倒していく。
ある程度、勘が戻ったところでウィンドウを開き、アイテム整理をしようとする。
しかし、何か違和感があった。
何か、と考えることおよそ一秒。
最も大切なものが無いことに気がついた。
そう、ログアウトボタンである。
ログアウトボタンが無くては現実に戻れない。

辺りでは、ログアウトと言ってみる人々も居るが、ログアウト出来ていない。
バグだとは思うがあまりにも致命的だ。
そこで俺らプレイヤーが光に包まれた。
目を開けると、そこは最初の街の転移門広場だった。
どうやら全プレイヤーが揃っているようだ。
そこへ、ローブを纏ったＧＭ風の人物が空中に現れた。
その人物はあってはならないことを言った。
曰く、ログアウト不可は仕様であり、ログアウト方法はこの世界のクリア。
そして、この世界での死は、現実での死であること。
ソードアートオンラインの舞台、浮遊城アインクラッドは百層から成っている。
このゲームのクリアには百層まで行く必要がある。
それを不可能だと考え、自暴自棄になったやつらは外周から投身自殺した。
かつてリスポーン地点だった黒鉄宮には、全プレイヤーの名前が刻まれ、死亡時刻と原因が分かるようになっている石碑があった。
その石碑の、自殺した者の名前には次々と横線が引かれ、その数は増え続けた。
しかし、人間とは成長する生き物である。
犠牲者はどんどん減っていき、層も着々と進められていった。

現在の最前線は４８層、生存者はおよそ７０００人だ。

第壱話　イザヨイの軌跡

回想を終えるのと同時に、主街区・アレムゲト・へ入る。
ＳＡＯにはＨＰが減る圏外と、減らない圏内が存在する。
当然ながら、主街区をはじめとする多くの街は後者に位置する。
圏内では、プレイヤーが泊まれる宿屋が多くある。
手頃な価格の宿屋に入り、一休みする。
そこで、ある約束を思い出す。
急いで、街の北にある転移門広場へ行く。
そこに、もう待ち合わせの相手は居た。
赤の服に白のマント。
攻略組で最も強いとされる男、ギルド・血盟騎士団・のギルドリーダー、ヒースクリフはすでに俺を待っていた。
「遅かったな。君の敏捷から察するに忘れていたのではないかね？」
「ぐ……」
図星だった。

彼が最強たる由縁は、彼の持つユニークスキルことサーバーに一つのスキル保持者であることもさることながら、この分析力にある。
どんな状況でも恐ろしい程冷静に考え、最善を導き出す。
彼は、それで何度もピンチを救った。
で、そんな彼が、攻略組の中でもソロを貫く変わり者の俺を呼ぶときはあの要件以外あり得ない。
「単刀直入に言おう。我がギルドに入ってくれ」
予想通りだった。
彼はこれまでも何度もこのように誘ってきた。
血盟騎士団は例外なく強者の集まりだ。
そこに入れる、ということは強さを認められたということであり、戦闘職の憧れであった。
しかし、答えはずっと前から変わっていない。
「嫌だね」
「どうしてかね」
いつもならここで食い下がっているヒースクリフが珍しく、問いを発した。
理由は二つあった。

一つは、昔から大人数での行動が苦手なのだ。
十人程度ならまだしも、血盟騎士団はそれより人数が多い。
そしてもう一つは、この男、ヒースクリフはおそらく運営、制作のいずれかと関係があると思ったからだ。
とりあえず、適当に返事をしておく。
「あんまり馴れ合いとか得意じゃないし、俺が入っても戦力にならないだろ？」
「そんなことはない。君は全プレイヤーの中で最も敏捷が高く、反射神経もいい。攻撃が当たることなんてほぼ無いそうじゃないか。それに、武器スキルの完全習得の早さ。その実力はかの黒の剣士より上かとも思うが？」
俺は敏捷にステータスを極振りしたため、防御はおろか、重い武器すら持てない。
しかし、その速さを活かした戦闘スタイルでノーダメージで戦闘をこなしていく。
さらに、武器系統のスキルを１０００まで熟練度を上げたのは、俺が最初だ。
そして、黒の剣士というのは、俺と同じβ上がりの鬼のような強さの片手直剣使いである。
強さのトップ３をあげるなら、ヒースクリフ、キリト、そして俺の三人が入るだろう。
だが、それは認めるが、ヒースクリフの知る俺ではキリトには勝てない。
「黒の剣士は強い。それこそ、俺なんかよりもな」

「そんなことはない。キリト君の強さがあの反応速度なら、君の強さは反射神経、そして私と同じ分析力だ。それに君の速さが加わればキリト君とも互角以上に戦えるはずだ」
「でも、あいつはどんな時も必ずどうにかしてきた。速さなんて飾りだよ」
「良いかね？君にはソードスキルを改変してしまう程の適正があるんだ。いくらキリト君と言えど、初めて見る技には対処しきれないだろう」
ソードスキルの改変。
それは本来打たれるソードスキルの動きの途中に、素早く手を動かし、別のソードスキルに繋げる技だ。
本来ならソードスキルがキャンセルされ、技後硬直を課せられるが、あまりの速さにそれを上書きしてしまうのだ。
理論上はいくらでもソードスキルを繋げられる。
確かに未知の連撃である。
「でも、ギルドは入らないよ」
「そうか。またいつでも連絡したまえ」
ヒースクリフは転移門に入り、消える。
俺は宿屋に帰り、すぐに休んだ。
しかし、その日は上手く休めなかった。

第弐話　四十八層ボス戦

ヒースクリフとの会話の翌朝。
俺はついに決着がつきそうな四十八層の迷宮区攻略に参加すべく、主街区の外へのゲートへ向かった。
もうすでに、いつものメンバーは揃っていた。
層には次の層へと結ぶ階段が一つだけある。
しかし、それは迷宮区と呼ばれるダンジョンにあり、階段はフロアボスによって守られている。
今日はついに、迷宮区の最深部への攻略を開始する。
ボス部屋も今日中に見つかるだろう。
攻略組にはおよそ、ヒースクリフ率いる血盟騎士団など大規模ギルド、中小ギルド、そしてキリトや俺を含む一部のソロが居た。
そして、主街区を抜け、見えてきた巨大な塔、あれが迷宮区だ。
攻略は順調に進み、見事ボス部屋も発見した。
明日には下見をし、万全の状態で一週間以内に次の層へのボス戦が開かれる。

しかし、下見を今終わらせる提案をした者が居た。
大半が賛成し、反対したのは俺やヒースクリフを含めた一部だけだった。
過半数の賛成により下見をすることになり、緑の髪の男が扉を開く。
瞬間、そいつはボス部屋に吸い込まれ、ボスの真下へ転がっていた。
ボスの両手剣により、重装備では無いにせよ、金属装備の男のＨＰが六割減った。
そこに居た誰もが驚き、動けなかった。
ボスの両手剣が再び、そいつに振り下ろされる。
ヒットする寸前、一人が投げた両手斧が軌道をずらした。
ギルド・ファントムミラー・のリーダー、エニグマが自らの武器を投げたのを合図に、全員がボス部屋に雪崩れ込む。
ボスにファーストアタックを決めたのは、一瞬でボス・ザ・アンデッド・キング・に肉薄した俺だった。
使い込んできたソードスキル、アクセルレイドがボスの四本あるＨＰバーの一本目を目に見えて削った。
今回はあくまでも下見だ。
少し動きを見ることが出来れば良い。
キリトやヒースクリフも攻撃を仕掛け、とうとうＨＰバーの一本が左端まで減った。

すると、ボスの動きが止まり、ボス部屋の入り口を守るかのように、中ボスと思われる・アンデッド・ハウンドナイト・がＰＯＰする。
ケルベロスに乗ったゾンビ騎士は、明らかに撤退の通路を無くしていた。
すかさず、エニグマやその他少しのメンバーがそいつの討伐にかかる。
が、ＨＰは全く減らない。
技後硬直を課せられた彼らに、ゾンビ騎士の片手直剣が襲う。
何人かは倒れ、動けなくなっている。
そこへ、ゾンビ騎士の剣がソードスキルを放つ。
それを、寸前で止めたのは、またしてもエニグマだった。
両手斧に赤い光が灯り、四発のソードスキルが片手直剣を止める。
しかし、なぜゾンビ騎士はダメージを受けなかったのか。
ある一つの可能性が思い付く。
「エニグマ！騎士だ！犬はダメージを受けない！」
俺の言葉を信じ、エニグマは上の騎士へソードスキルを当てた。
今度こそ、明らかなＨＰの減りがあった。
そのまま、中ボスを倒し終了かと思ったが、さっきの扉を開いた男が言う。
「このままなら行ける！倒しちまおう！」

その声に賛成の声が多く上がり、何があってもおかしくないボス戦は続いた。
その後も、キリトやヒースクリフの善戦により、ＨＰバーは残り二本となった。

第参話　４８層ボス戦（終）

ボスのＨＰバーが残り二本となった。
そこで、ボスは一度止まり、咆哮をあげた。
すると、ボス部屋の四方から、▪アンデッドウォリアー▪がＰＯＰする。
その数、およそ３０。
そして、ボスへの攻撃は全くＨＰバーを減らさなくなった。
恐らく、あのｍｏｂを先に倒さなくてはならないようだ。
ヒースクリフ、キリト、エニグマ、俺を中心に、倒していくが、数が多すぎる。
その上、素早く攻撃が当たりにくい。
だが、ヒースクリフだけは、まるで計算済みかのように、サクサクと倒していく。
５分もかけて、ようやく全てを倒しきった。
「みんな！ソードスキルだ！」
エニグマの一声で、大量のソードスキルがボスを襲う。
一瞬で、ＨＰバーラスト一本まで追い詰められたボスは、再び止まり、驚くべき変化が起きた。

ＨＰバーの表示が消えたのだ。
そして、ボスは赤く幾何学模様の線を体に纏い、その巨体がより大きくなった。
と、同時にボス部屋の壁が中央、つまりボスへ向かって迫ってくる。
壁は、ボスの大剣ほどの半径を残して停止した。
「おい、扉が無くなってるぞ！」
少し前まで出口の扉があったところにはただ壁だけが残されていた。
このままでは何も出来ない。
とりあえず、ボスへ攻撃を仕掛けることが先である。
「一斉にソードスキルだ！」
俺の声に合わせて、全員がソードスキルを放つ。
が、ボスには効いていないようで、技後硬直のエニグマへ大剣が迫る。
エニグマは大きく飛ばされ、ＨＰは半分ほども削られたようだった。
とにかく今は、ボスの討伐法を見つけるしかない。
新たにボス部屋に配置されたものはないか、確認する。
すると、明らかに無かった、十字架のオブジェクトと、大きな光源があった。
「分かったぞ。おい！十秒持ちこたえてくれ！」
「了解した」

ヘイトをヒースクリフにもってもらい、光源を十字架の後ろへ持っていく。
すると、大きな十字架の影がボスの足元へ広がった。
「グオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!」
ボスのＨＰバーが現れた。
そこへ渾身のソードスキルを放つ。
ＨＰは、減る。
「おっしゃいくぞ!」
エニグマの号令で色とりどりのソードスキルが放たれる。
そして、ボスのＨＰバーは残り半分になった。
すると、ボスは剣を腰元までひねった。
あの動きは、回転ぎり。
この狭い空間で放たれれば確実に当たってしまう。
「防げぇぇ!」
俺の声が間一髪間に合ったのか、回転ぎりが始まるころには、全員防御姿勢をとっていた。
にも関わらず、一人の防具が破壊されたようだった。
俺自身、ＨＰは七割ももってかれた。

「お前、それ」
さっきの防具を破壊された男に、エニグマが指を指している。
指の先には、あるギルドのマーク。
この世界最大のＰＫギルド・ラフィン・コフィン・
「はぁ。バレたかぁ。まさかこんなとこでバレるとはなぁ」
全員が驚愕に目を見開く。
「まあ良い。お先に消えるぜ。せいぜいボス攻略頑張るんだな」
男はポーチから転移結晶を取り出すと、転移コマンドを唱え消えた。
辺りには男の声だけが反射していた。
「グオオオオオオオオオオオオ！」
地響きにも似たボスの咆哮で、さすが攻略組と言うべきか全員が臨戦態勢に移った。
ボスはまたもや体をひねり、回転斬りのモーションに入る。
「させるか！」
俺はボスへ向かって猛ダッシュした。
短剣が緑に輝く。
そして、二発のソードスキルがボスと、大剣を襲った。
ボスのＨＰこそ少ししか減らなかったものの大剣は大きく後ろへ飛ばされる。

「スイッチ！」
俺が後ろに下がり、エニグマ、キリトがボスへソードスキルを放つ。
システム外スキル・スイッチ・
それは二人以上が攻撃を交代し、連続で攻撃する技である。
「「スイッチ！」」
キリトとエニグマが後ろへ下がり、今度はヒースクリフがソードスキルを放つ。
「スイッチ」
ヒースクリフと俺が入れ替わる。
ボスのＨＰバーはほぼ０。
つまり、この一撃で終わる。
「喰らえぇぇ！」
俺の短剣が青く輝き五発のソードスキルが放たれる。
短剣用連続技・インフィニット・
それが、ボスの残り僅かだったＨＰを奪った。
直後、ボスはポリゴン片となり、派手に爆散した。
４８層ボスはファーストアタック、ラストアタックともにイザヨイに決められ、討伐された。

第四話　陰謀（序）

４８層ボス戦の後、俺は４９層の転移門の有効化をヒースクリフに任せ、攻略組に居る数少ない友人の元へ向かった。

エニグマ。

今回のボス戦で数多くの人を守った両手斧使い。

「どうした？」

「あぁ、お前と少し話したくてな」

エニグマは４９層へは向かわず、主街区に戻るところだった。

俺も丁度戻りたかったので、同行することにした。

「ところで、ラストアタックボーナスは何取ったんだ？」

そう、ボスごとにラストアタックを決めた者に報酬として、強力なアイテムが送られる。

今回は、短剣、曲刀、片手棍の中から一つ選べた。

「曲刀にしたよ」

「あいつにプレゼントするんだな？」

俺が使用武器でない曲刀を選んだ理由など一つと知っているエニグマは、からかうように訪ねてくる。

「まあな」

エニグマの言う、あいつとは、攻略組ほどのレベルは無いものの、中層クラスではトップの実力を持つ女、トモエのことを言っている。

トモエとは一応いまだにパートナーを組んでおり時折一緒にクエストをする仲である。

「でもよ、短剣にしなくて良かったのか？」

そう、本来ならラストアタックボーナスを人にあげることなどあり得ない。

たとえ、使用武器でなくとも、売るだのして金を稼げば、戦力の補強になる。

それに、ラストアタックボーナスは、基本的にその層以降１０層近くは使える性能だ。

なのに、プレゼントする理由、それは

「金には困ってないしな。それに今回の短剣は今のより弱かった」

「おいおい、化け物かよ。その短剣どこで手に入れた？」

俺の愛用している炎を模した短剣は、２５層にてつい最近出現した、ボス級モンスター・ザ・フレア・フェニックス・がドロップした短剣だ。

この短剣の大きな特徴はただ一つ、武器ごとに定められている耐久値が自動回復する

のだ。
　つまり、よっぽどのことがなければ壊れない。
「化け物じゃないよ。ただのボスドロップだ」
「うへぇ。じゃあ今度３３層に出現したボスの討伐手伝ってくれよ」
「なんだ？お前もラストアタックボーナスより強い武器を手に入れたいのか？」
　少しからかいつつ言う。
「そりゃそうだ。そんな強いのあったら攻略ペースは格段に上がる。だから頼む」
　攻略ペースが上がるなら手伝っても良いか、と考え、了承の意味を込めた頷きで返す。
　その後も二人で駄弁りつつ、ようやく迷宮区を抜ける、というところで、不意に視界が地面に叩きつけられた。
　倒れた、ということに気付き、ＨＰバーの横を見る。
　予想通りの状態異常アイコンがあった。
　麻痺毒。
　文字通り、麻痺させ動けなくする毒である。
　だが、この迷宮区には麻痺を使うｍｏｂは居ないはずだ。
　つまり、それが意味するのは、プレイヤーによる意図的なもの。
　プレイヤーにはカーソル、というものがあり、通常で緑、犯罪を犯すとオレンジとな

る。
そして、今まさに目の前に現れた、二人のプレイヤーはオレンジカーソルだった。
ならばこれは、麻痺を使ったＰＫ行為に他ならない。
俺の全身に悪寒が走り、死、という結末が脳を恐怖で埋め尽くす。
そこへ、殺人鬼の嘲笑が響く。
「おいおい、エニグマだけで良かったのに、紫の暴風もセットか！こりゃすげぇ収穫だな！」
甲高い声を発しているのは、ＰＫギルド・ラフィン・コフィン・の幹部、ジョニーブラック。
「生きてて良かったよ。私以外に殺されてたらどうしようかと思ってたよ、イザヨイ君」
俺に話しかけて来るのは、同じくラフィン・コフィンのメンバー、かつての恋人、ベルセポネ。
しかし、何故今日ここで待ち伏せが出来た？
本来なら今日は探索の予定だった。
なのに、ボスを倒すというのは予測出来ても、確信は得られないはずだ。
いや、内通者が居れば、あの内通者が教えれば、ここで待ち伏せも出来る。
「へっ！残念だが、お前は少しイレギュラー過ぎるんでな、先に死んでもらうぜ」

ジョニーの声に合わせ、ベルセポネが俺に迫る。
圧倒的質量を持つ、死、が俺にゆっくりと、だが確実に迫ってきている。
俺は少しずつ動く腕でウィンドウを開き操作する。
「解毒アイテムもポーチに入ってねぇのか？情けねぇなぁ！」
言葉と共にジョニーの蹴りが脇腹に刺さる。
「ぐはっ！」
だが、少しながらも時間が出来た。
今出来る、ありったけの力を使い操作していく。
「さようなら、イザヨイ君。それと、ゴメンね？」
ベルセポネの両手剣に赤い光が灯り、重い一撃が俺のＨＰを一瞬で０にした。
俺は、ポリゴン片となり爆散した。
すなわち、俺は、死んだ。

第五話　不死鳥の転臨

俺のＨＰはベルセポネの放った一撃によって０になり、俺は死んだ。
「あっけねぇなぁ！あの紫の暴風でも麻痺の前には無力だったな！」
ジョニーの声が、聞こえる。
直後、辺りを紫の炎が包んだ。
「あ？なんで炎なんか!?」
ジョニーとベルセポネ、そしてエニグマが何事か、と驚いている。
炎は徐々に集まり、人の形を作り上げる。
「てめぇ!?何で生きてやがる!?」
「死んださ。だけど生き返ったんだよ。お前には理解し得ない力でな」
「まさか、二人目のユニークスキル使いだとでも言うのか!?」
そう、恐らくは俺の習得した▪鳳凰剣▪というスキルもユニークスキルなのだろう。
「あぁ。恐らくな」
「死なねぇって能力か!?そんなのゲームバランスが崩れている!?」
鳳凰剣に設定された能力は３つ。

1つは炎の鎧が身を包み、あらゆる状態異常を受けない。
また1つは、炎を自在に操ることが出来る。
そして、最後1つは、まるで不死鳥のように、死んでも蘇る。
当然制約もある。
まず、ストックという要素があり、これが0になれば俺は本当に死ぬ。
今の俺のストックはたった今使ったので2。
つまり、あと2回死ねる。
「ユニークスキルの強さはヒースクリフでわかってるだろ?」
「ちっ!退くぞ!」
「逃がすかっ!」
俺は持ち前の敏捷を生かし、逃げようとした二人に追い付く。
が、突如として視界が煙に埋められた。
「煙幕か!?」
煙幕が晴れた後、そこにはもう何もなく、ただ静寂のみが残響していた。
俺はエニグマのもとへ行き、解毒結晶を使う。
動けるようになったエニグマが俺に問う。
「お前ぇ、ホントに死なねぇのか?」

「あぁ。ただ制限はあるぜ」
「何かは聞かないが、その力使いすぎねぇ方が良くないか？」
「同感だ。これがバレたらインタビューとか来てめんどくさい」
「秘密にしといてやるよ」
エニグマは俺の気持ちを憚ったのか、黙っていてくれるようだ。
その後はすぐに主街区へ入り、宿屋を探すことにした。
案外早く、空いている宿屋を見つけられ、チェックインを済ませる。
部屋へ向かう最中、エニグマが話しかけてくる。
「なぁ、ベルセポネを悪く言うんじゃねぇが、あいつはもう本物のＰＫだよ」
「だからどうした」
俺の冷ややかな声に圧倒されたのか、エニグマは一瞬息が詰まる。
「だから、トモエに危害がないように、もうあいつのことは忘れて、ただのＰＫとして見ろ」
そんなことは分かっている。
今は、守るべき、トモエ、という存在が居る。
だが、ベルセポネは、ベルは、まだ人を殺していない。
そう信じたかった。

「いや、あいつに人は殺せない」
ベルがＰＫということを認めたくない。
その感情のせいか声が震える。
「あのな、お前はホントにそう思ってるのか？」
当たり前だ。
だが、口は、まるでのり付けされているかのように動かない。
「例え、大切な人が殺されかけていたとしても、同じことが言えるか？」
それは、それは、言えないのだろう。
しかし、ベルは、かつてのあの優しいベルはどこへ行ってしまったのか。
「ベルセポネはもうラフコフの一員だ。次会ったら殺す覚悟をしとけ」
そんなことはあり得ない。
あり得てはならない。
俺はこれまでも人を何人と殺した。
だが、例えＰＫだったとしても、俺はベルを守ってしまうだろう。
それほどまでに、心を許したのだ。
「とにかく、ベルセポネはもうお前の知ってるベルセポネじゃねぇよ」
その言葉が、俺の中の何かを狂わせた。

目から涙が止まらない。
部屋に入ってからは、夜遅くまで、ずっと泣きじゃくっていた。
かつての恋人が、どこか遠くへ行ってしまった。
そんな気がした。
「ベル。お前はもうあのベルじゃないのか？」
俺の問いは、夜の静けさに掻き消え、ただ沈黙だけが返ってきた。

第六話　迫る悪意

ラフコフに襲われた、次の朝。
俺は、フレンドからのメッセージを確認していた。
やがて、下の方に行くにつれて、緊張感が高まる。
今、最も気になる人物から来ているか、それが怖いのだ。
その人物の新着メッセージは、ある。
俺は、歓喜した。
急いでそのメッセージを読み始める。
文はたった一文、『４８層、主街区北、ネペントの出る森に１１時』だけだった。
今は７時。
つまり、あと四時間でベルとのコミュニケーションの場がてにはいる。
当然、危険もある。
この文が俺をおびき寄せる罠かもしれない。
だが、俺の敏捷があれば、例え罠だったとしても逃げ切れる。
ならば、行かない手はない。

若干の不安を感じつつ、宿屋の一階へ降りていく。
下では、すでにエニグマが待っていた。
「悪い、今日は用事が入った。だから、４９層へは一人で行ってくれ」
幸い、エニグマは訝しげに思うこともなく、了承してくれた。
「でもよぉ、用事ってのは何なんだ？まさか、ベルセポネ関連か？」
「あぁ。メッセージでネペントの出る森に集合だそうだ」
「森って、圏外じゃねぇか。危ないだろ？」
確かに怪しいとも思う。
だが、ベルとのコミュニケーションが取れるだけで、俺にとっては大きな進歩に繋がる。
「そうかもしれないが、せっかくだし行きたいよ」
「分かった。だけどな、死ぬなよ？」
死ぬ？
俺は鳳凰剣のおかげでまだ死なないのだ。
二回の命があれば倒すことすらできる。
その後、時間はあっという間に過ぎ去り、約束の時間になった。
集合の場所へ行くと、そこに、すでにベルは居た。

ただし、昨日とは明らかに違うことがあった。
プレイヤーカーソルが、犯罪者を示すオレンジから、緑に戻っていたのだ。
「ベル、カーソルが元に？」
「えぇ。カルマクエストも案外楽で良かったよ」
聞く話によると、カーソルを元に戻す、カルマクエストはその罪が重いほど困難になり、五人殺すと、戻るのは不可能と言われている。
そして、さっきの楽だった、という発言から、やはりベルは人を殺していないことが分かった。
「なぁ、ベルはどうしてオレンジになったんだ？」
「麻痺させる担当だったよ。でも、殺したようなものだよね」
いや、それは違う。
少なくとも、好き好んでＰＫをするやつよりは百倍ましだ。
「自分からやってたのか？」
「ううん。ジョニーに脅されて、麻痺担当にさせられたの」
「ならば、ベルに罪はないよ。今ならまだ引き返せる。戻って来ないか？」
ベルは迷ったように俯き、頭を抱える。
「あのね、今日は、私のお願いを聞いて欲しくてきてもらったの」

「お願い？」
正直意外だ。
俺の知ってるベルは何でも自分でやろうとするタイプの人だ。
「うん。私、もうね、ラフコフを……」
言葉はそこで途切れた。
ベルの目が、信じられないという風に、見開かれる。
直後、ベルは崩れ落ちた。
「イッツ・ショウタイム」
ベルに牙を向いた男の嘲笑うかのような声が、森にこだまし、殺人鬼の接近を知らせた。
ベルの首もとには恐らく、麻痺毒つきの、ナイフが刺さっていた。
「始めようぜ、紫の暴風。異端者同士の殺人ゲームをよぉ」
この世界最強の殺人鬼が俺にナイフを向け、笑う。
俺の耳には、ただ殺人鬼の笑い声だけが渦巻いていた。

第七話　鳳凰の翼

世界最強のＰＫ、ラフコフリーダー、ＰｏＨがナイフを手に迫ってくる。
少し右にずれただけで回避し、お返しに一撃喰らわせる。
ＰｏＨが怯んだ隙に、ソードスキルを叩き込む。
かなりＨＰは減ったはずなのに、まだＰｏＨは余裕を見せている。
「なあ、紫の暴風よぉ、お前はユニークスキルもってんだよな？」
突然の問いに驚くも、こいつに教えてやる必要もない。
「実はな、こっちももってんだ。ユニークスキルをなぁ」
これは恐らくブラフだ。
しかし、その恐らくという考えが恐ろしい。
九割違おうが、もし残り一割だったら、俺は間違いなく死ぬ。
「俺のユニークスキル、特別に教えてやるよ」
さっきまでの余裕もユニークスキルがあるから、と考えれば筋が通る。
「俺のユニークスキルはよぉ、深界剣。背面からの攻撃にダメージ追加と、気配の完全遮断、索敵能力アップってとこだ。あともう一つとっておきがあるが、実際使ったら教え

てやるよ」
見事にＰＫ向きのスキルだ。
背面からの攻撃は、気配遮断と索敵能力アップで上手く使え、簡単に人は殺せる。
「なあ、ＰｏＨ、お前、何で教えてくれたんだ？」
「決まってる！ここでお前は確実に死ぬからだ」
予想通りの発言。
俺の短剣はＰｏＨを上回る速度で放たれ、確実にＨＰを奪っている。
なのに、なぜあいつはいまだに余裕そうなのか。
その答えはいくら考えようと、ユニークスキルのとっておきとやらしか思い付かない。
俺の一瞬の油断をつき、ＰｏＨの短剣が俺に襲いかかる。
ＰｏＨの短剣に纏われている光は濃い青色。
そして、初動のモーションからソードスキルを予測する。
俺はその予測したソードスキルと同じ軌道で、より多い連撃のソードスキルを放った。
「甘い。まだまだだな」
ＰｏＨの声とともに、俺の腹に拳が刺さる。

体術スキルに存在するソードスキル・キャンセルスプリング・ソードスキルをキャンセルし、技後硬直なしでパンチを繰り出す技で、ダメージ自体は大きくないものの、相手から確実にスタンを奪える。

つまり、このままだとＰｏＨは簡単に俺のＨＰを０に出来る。

ＰｏＨの短剣から今度こそ濃い青色の光を纏うソードスキルが放たれる。

短剣が俺を斬る、その寸前、それは起こった。

俺の姿が掻き消え、ＰｏＨの後ろへ回る。

「何をした!?」

「簡単さ。ソードスキルを使ったんだ」

「あんなソードスキルは知らない。貴様まさか!?」

ＰｏＨが知らないのも無理はない。

本来、鳳凰剣スキルに設定されたソードスキルを使うには、一度死に、炎を纏う必要がある。

だが、熟練度が５００を越えてからは多少なら使えるようになったのだ。

その、使用出来るようになったソードスキルの一つ・アクセルアラウンド・を使ったのだ。

アクセルアラウンドは、任意の方向に状態異常を無視して、瞬時に回復しながら移動、

という効果を持っている。
スタンも立派な状態異常として認められている。
そのため、俺は片手をついてダッシュ、という荒業が可能だったのだ。
「ちっ！めんどくせぇ！一気に片付けるぜ！」
ＰｏＨの声に合わせ、四人ものオレンジプレイヤーが現れる。
昨日襲ってきたラフコフ幹部、ジョニー。
そして、同じくラフコフ幹部、赤目のザザ。
残る二人は知らないが、少なくとも俺らの味方ではない。
「数で攻めるってことねぇ」
「そうだ。お前に、勝ち目は、ない。おとなしく、ここで、殺されろ」
ザザが言ってくる。
確かに、勝ち目はないに等しい。
だが、逃げるなら出来る。
「さて、勇者さんよぉ、こんな絶望的な状況、きっとあんたなら乗り越えられんだろぉ？見せてみろよ、お前の本気ってやつをよぉ。始めようぜ、真のデスゲームをな。ラウンド２開始だ」
ＰｏＨの声が開始の合図かのように、四人は一気に俺へ迫ってくる。

第八話　不死鳥の半身

四人が俺の短剣を的確に弾いていき、俺のＨＰはとうとう残り三割になった。
「どうだ？殺されるってのはよぉ。怖いか？」
ＰｏＨが嘲笑うかのように言う。
「今なら助けてやらないこともない」
その発言に俺やベルを含め、ラフコフメンバーですら驚いていた。
「お前が俺らのギルドでＰＫをするなら、お前もベルセポネも助けてやる。安心しな、ベルセポネはラフコフを抜けていい。どうだ？悪くないだろ？」
その程度で俺やベルが助かるならそれも悪くない。
だが、俺はラフコフには収まらない。
人を殺すことに躊躇がないところを考えれば、根っこは俺もあいつらＰＫと同じだろう。
そして、あいつらは殺すことに快感を覚えている。
しかし、俺はよりたちが悪い。
人を殺すことにより、自分を正当化しようとしてるのだ。

そこにあるのはただの、渇望。
人を殺すことでしか大切なものを守れず、それでしか存在を示せない、愚かなる人間。
俺はおそらくＰＫになっても、そのギルド自体を壊してしまいかねない。
そんな人間をラフコフに入れるということが、どれだけ危ないことか、それをこの男は分かっていない。
ならば、答えは一つ。
「俺もお前も人を殺すのは同じかもしれない。だけどな、その意義が違う。俺はお前らよりいっそうたちが悪いよ。そんなのがお前らの仲間になんてなれない」
「そうか。なら、ここで死ぬんだな」
ＰｏＨが俺の首へ短剣を振り下ろす。
当たる、寸前、その短剣は宙を舞い、遠くへ刺さった。
「てめぇ、何で？」
俺は、炎を纏い、火炎弾で短剣を弾いた。
「その力は本来死ななければ使えねぇんじゃねぇのか？」
そう、熟練度７００まではそうだった。
だが、つい最近ようやく、炎を纏うくらいなら死なずとも可能になった。
その結果がこれだ。

「さて、逆転だな。反撃させてもらうぜ」
俺は炎を纏った短剣で最も近くに居た、名前も知らないラフコフメンバーのＨＰを、０にした。
そいつの体が爆散するのを待つ暇もなく、もう一人もＨＰを０にする。
鳳凰剣に許された、超高速ソードスキル・イルミネートヴァレット・１０連撃を当てたのだ。
二人がほぼ間を開けず爆散する。
「は？てめぇなんだよ、その力は」
ラフコフ幹部が二人して後ずさる。
あのＰｏＨですら後ずさり、こちらを警戒している。
「俺はもう逃げさせてもらうぜ。追いかけたいなら追いかけてこい」
ＰｏＨをおいて、ベルのところへ急いで向かう。
どうやら、まだ毒は解除出来ていないようだった。
俺はベルを抱え、主街区へ走る。
幸い、もう後を追ってくる足音は無かった。

第九話　冥界の女帝

主街区に入ると、二人して脱力してしまい、その場で崩れ落ちる。
ベルも毒が解けたようで、何とか立ち上がる。
「あのね、イザヨイ。あの時言えなかったけどさ、私ラフコフ抜けたよ」
俺は、何とかして抜けさせなくてはならないと思っていたがために、もう抜けていた事に驚きを隠せなかった。
「私、イザヨイ君さえ居ればもう何が起こっても良いかなって考えたの。だからさ、これからもずっと一緒に居て」
捉え方によっては告白とも受け取れるその言葉に、俺は困惑した。
俺はついさっき人を殺したばかりなのだ。
それでも、大切に思っていてくれた。
ならば、答えは一つだ。
「また、前みたいな、いや、前以上の関係になろう」
ベルへの思いは同じだ。
「ありがとう。ホントにありがとうね」

ベルはその場で泣き崩れ、再び元の関係に戻ったことを噛み締めていた。
およそ五分泣き続けたベルは、今やすっかり元通りだ。
「イザヨイ君、私のレベルでも一緒に居てくれる？」
ベルのレベルは攻略組トップの俺より、１５ほど下だ。
だが、それでも十分過ぎる程に高いレベルだ。
「当たり前だろ。俺はベルの側にずっと居るよ」
ベルが照れた様に顔を俯ける。
「ありがと。これからもよろしくね」
こうして、後々攻略組でも指折りの実力を持つ▪冥界の女帝▪誕生への第一歩を踏み出した。
～短編　エニグマブレイン～
俺は、親友のイザヨイと別れた後、４９層主街区へ転移した。
４９層のテーマは、ボードゲーム。
将棋盤型のダンジョンがあったりと種類は豊富だ。
イザヨイに伝えたら、何だか無双出来そう、だか言ってたが、正直俺はボードゲームが苦手だ。
エニグマ、熊野　幸治は元々ゲームが嫌いだった。

理由は簡単、そんな無意味なものをやる精神が理解出来なかったからだ。
故に、ボードゲームにも触れてこなかった。
実際、このｓａｏが始めてのゲームなのだ。
イザヨイと会えたことは嬉しいし、出会いの場としては良いかもしれない。
だが、これに時間を費やし過ぎる人は本当に理解しがたい。
１７歳にして、ｓａｏを遊んでみたのも、大学受験前、最後の自由だったためである。
しかし、ここは既に脱出不能のデスゲームである。
恐らくは今頃同級生は受験勉強大詰めだ。
対して俺はゲームの中。
自分がとても惨めで悲惨に感じる。
それでも、俺はここでトップランカーなのだ。
ならば、俺は生きていかなくてはならない。
現実に帰ればそこに居るのは恐らく大学に進んだ仲間だ。
もう、彼らとは仲良く出来ないだろう。
だが、それでも俺は、現実に戻った時に胸を張れるように生きていく。
そんな決意を固めつつ、俺は次の層のフィールドへ足を踏み込んだ。

第十話　新たなるヒロイン

ベルを救ってからかなりの月日が経った。
現在の最前線は７４層、生存者はおよそ６０００人だ。
俺は明らかに異様な光景に出くわしていた。
狐のような耳の全体的に黒い衣装の女と、猫耳のメイドが剣を打ち合っている。
このようになったのには、こんな経緯がある。
「ねぇ、今日はどこ行くの？イザヨイ君」
「え？んー、そうだな、βテストの時の思い出の場所にでも行くか」
俺の隣で手を繋いで歩く女はベル。
正式にはベルセポネだ。
冥界の女帝の名を冠するその美女は、何があったか今は俺の結婚相手だ。
結婚、と言っても、所詮ここはゲームをの中だ。
結婚を申請するようなメッセージに承諾の意を示すだけでいい。
そして、結婚するとストレージ内の全てのアイテムが共通化、すなわち統合されるのだ。

よって、そう簡単には結婚はしない。
だが、なぜか俺はベルと結婚出来てしまった。
これがこの世界だけの関係であることは間違いない。
だが、俺は現実に戻ってもベルを好きでい続けるし、どうせなら付き合いたい。
「イザヨイ君?ボーッとしてたよ」
「ああ、ごめんごめん、ベルがあんまりにも可愛いから」
「もうっ!」
ベルは顔を赤らめて、プイッとそっぽを向いた。
あぁ、こういうのをバカップルって言うんだなぁ、と感慨に浸る。
で、βテストの時の思い出の場所とは、一層の主街区にある店だ。
ようやく着いた。
いつもは全く人が居ないその店に珍しく先客が居た。
このあと俺は、ここへ来たことを後悔する。
そこにいたのは良く見知った、赤い衣装の女。
「あれ、イザヨイ何してるの?」
「うっ、見れば分かるだろ、トモエ」
トモエ、それが俺の大切な人の一人だった。

「デートねぇ、爆ぜろ」
「えぇ、何で」
トモエは俺がベルと居るといつもこんな感じだ。
理由は全く分からないが、からかわれてることは俺でも分かる。
「とりあえず、俺はもう行くよ」
「待ってよ！ここに来たってことはその子もそういう風にしたかったんだ」
「え？な、なんのことかなぁ」
「バレてるよ」
何を隠そうここは、コスプレ館。
獣っ子とかメイドになれるやつだ。
何故茅場がこんなのを作ったのかは謎だが、β時代は、仲間と
ここへ来てコスプレをし、吸血鬼になったら、可愛いと言われ、男に告白された悪夢の場所。
ここへ来たってことはつまり、そういうことだ。
「だって、ベルが可愛いから似合うかなってさ」
「もうっ！」
こんなやり取りを、トモエは死んだ目で見ている。

とにかく、これは早く用事を済ませるべきだ。
「店主、一人だ！」
「なにいってるの？三人ですよー！」
トモエが余計なことをした。
この店だけか、二回目の注文があったらそれ以降は受け付けない。
つまり、
「結局俺も着るのかよぉぉ！」

第十二話　新たな力

結局、コスプレをすることになったのだが、今回の衣装はメイド、だそうだ。
決して自分で選んだ訳ではない。
トモエから、
「女顔だし絶対似合うって！ほら早く着てこい」
と、言われてしまい今に至る。
着たは良いが、鏡の自分を見て、とても二人の前には出られないと自覚する。
だが、
「遅い。開けるよ」
トモエの容赦ない連れ出しにより、二人に見られた。
二人の感想は揃って、
「か、かわいい」
だった。
しかも、ウィッグまで付けられたせいで、今や完全に女の子である。
そして、二人はというと、これまた驚く獣耳だ。

ベルは黒い衣装に狐耳、トモエは赤い衣装に猫耳。
店内はかなりカオスに包まれている。
「ねえ、もう着替えても」
俺がそこまで言ったところで、
「「駄目」」
「あ、はい」
としか言えなかった。
こんな時だけ無駄に息が合っていた。
ずっとこれで良いのになぁ、と思わずにはいられなかった。
そして、時は十分ほど経過し、ようやく終わりが見えてきた。
が、そんな安全な静寂はトモエによって破られた。
「イザヨイ、あんたら結婚したんでしょ？なんで今更？」
「え？」
それは禁忌だった。
「イザヨイ君と関わって何か問題が？」
「いや、ただ横取りしたのをどう考えてるのかなぁ、ってさ」
プチン、と両者の怒りが込み上げたのを感じた。

どうにかしなければ、と思った時には既に手遅れだった。
「横取り、ねぇ。イザヨイ君は私を選んでくれたのよ？何か問題あるかしら？」
「元々、イザヨイは私がパートナーだったのよ？」
「攻略組にも居ないあなたと、攻略組の私では実力に差があるわよね？」
「証明できるの？ご自慢の強さとやらを」
「圏内戦闘でもする気？やめておきなさい。流石に対人戦闘はあなたに勝ち目はない」
「舐められたものね。私だってイザヨイに育ててもらったんだからね」
どんどん白熱していく喧嘩は、ついに圏内戦闘に発展した。
圏内戦闘とは、圏内であるためにＨＰが減らないことを生かしたｐｖｐの一つだ。
なによりも目の前で剣が止まるので、どうしても衝撃に大きく仰け反らされることが多々かる。
そんな戦闘をするようだが、武器はほとんど関係なくなるため、二人ともメインの武器は使わず、予備の剣を手に握る。
圏内と言えども、武器が破壊されることはある。
ここでメインアームを失えばその損失は大きくなる。
その事を考えた、テンプレになっている戦い方だ。
２人の間で火花が散る。

互いの視線が交錯し、決戦の火蓋が切っておとされた。